

第 31 回 日本エンブリオロジスト学会 学術集会・ワークショップ

大さん橋ホール、2026.1.7～1.8

IVF 児と ICSI 児における身体発育および発達予後の比較 — 当院における 2016–2023 年の調査

医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

安藤光里 田中千喜 眞鍋麻衣 堀金聖羅 佐藤学 寺脇奈緒子 森本義晴

【目的】

顕微授精 (ICSI) 児に発達遅滞のリスクがあるとの報告が散見されるが、一定の見解は得られていない。特に日本国内での短期予後に関するデータは限られている。本研究では、当院における ART 出生児の身体発育と発達を調査し、受精方法による差異を明らかにすることを目的とした。

【方法】

2016～2023 年に当院で出生した ART 児のうち、調査に同意した保護者を対象とした。1 歳 6 か月および 3 歳時点で身体計測 (身長・体重・頭囲) と KIDS 乳幼児発達スケール (運動, 操作, 理解言語, 表出言語, 概念, 対こども社会性, 対成人社会性, しつけ, 食事の 9 領域) を実施した。TESE-ICSI による出生児は除外した。回答は 1 歳 6 か月で 314 名 (回答率 44%)、3 歳で 171 名 (回答率 54%) であった。受精方法 (IVF/ICSI) と性別で 4 群に分類し、統計ソフト EZR を用い Kruskal-Wallis 検定で解析した。

【結果】

1 歳 6 か月時点では、ICSI 児の身長が IVF 児より有意に低値 (数値 vs 数値) を示したが、体重には有意差を認めなかった。総合発達は IVF 男児と比較して ICSI 女児で有意に早く、また表出言語およびしつけの領域では女児が男児より早かった。検査時年齢を下回る発達を示したのは IVF 男児の一部項目 (表出言語、対こども社会性、対成人社会性) のみであった。3 歳時点では総合発達および各領域で有意差はなく、検査時年齢を下回る項目も認めなかった。

【結論】

当院での調査では、1 歳 6 か月時点に一部の差異を認めたが、3 歳では差は縮小し臨床的に大きな発達遅延は確認されなかった。本研究は回答率が限定的であり、結果の解釈には慎重さが求められるものの、ART 児の発達は受精方法や性別にかかわらず概ね良好と考えられた。今後は自然妊娠児を含めた対照比較や長期追跡により、ART 児の安全性をさらに検証する必要がある。